

會



報

昭和二十四年十一月

148

日本山岳會

山岳スキー術の始祖

ツダアルスキー

福岡孝行

スキーがわが國民のうちにひろく根を下したのは、明治の末葉、高田師團の献身努力によつてであるが、その技術的指導はオオスターリイの參謀將校テオドル・フォン・レルヒによつてなされた。このレルヒが傳受したのは外でもないマテアス・ツダアルスキーの創設した所謂「リリエンフェルトのスキー術」なのである。それ故に考へ様によれば、ツダアルスキーはわが國のスキーと極めて密接な間柄にあつた存在だとも言える譯である。

彼は若くしては体操家として著名であつた。彼みづからリリエンフェルトのスキー術の序文にも書いてあるやうに、彼は極めて廣範圍にわたつて學術、美術、体育の教養を身につけている。のみならず有能な旅行家であつて、危険をおかしてアフリカを歩いてゐるしまた經驗知識に富んだガイドレスの登山家としても知られてゐる。一八八九年、彼は自らの學問的藝術的な理想に生き抜くために、俗塵を避けてリリエンフェルトの町外れハアベルンライトに隱遁してしまつた。彼は一八五六年、丁度ハリスが下田に來た年の生れであるから、日本流に云つて三十四歳のときである。このハアベルンライトにツダアルスキーは獨力で家を立て、理想に忠實な生活を営んでゐた。

センの「グリーンランド横斷記」を読み、スキーの絶大な効用を知り、これが機縁となつて、ノルウェイでスキーを求め、スキーを習ひはじめた。何事も徹底的に究めねばやまない研究心を以て彼は来る冬も来る冬もスキー術研究に没頭した。この様なスキーへの精進は六冬續いた。この六年の間に、ノルウェイ式縮具に不満を感じた彼は二百種類に及ぶ縮具を考案しては捨てて最後に所謂「リリエンフェルト式縮具」を完成した。面白いのは、この六冬の間彼はたつた一人で滑つてゐたといふことである。一八九六年、スキー術を完成した彼ははじめてその独特な縮具を携へて、そのスキー術を公開すると共に「リリエンフェルトのスキー術」なる一書を世に送つた。このスキー術は忽ち各所に反響をよび、ノルウェイ流のスキー術との間にはげしい論争が展開し、確信に燃えるツダアルスキーと雪の上でまで手合せが演ぜられるに到つた。

元來ノルウェイ流はその平地の多い丘陵地に發達したものであるに反して、ツダアルスキーの技術はヨオロツパの屋根アルプス前衛の山、しかも極めて急峻なリリエンフェルト近郊の山を舞臺として成長したのである。のみならずツダアルスキーは、誰に師事するでもなくひとり自らの体操家としてのすぐれた運動感覚に信頼してその技術を創り上げたのであるから兩者の相違は極めて著しいものがあつた。彼はノルウェイの技術は急峻な山岳地帯には不適であるとし、そのシュテムボオゲンを中心とする滑降法を堅持して一歩も譲らなかつたのである。しかし、ここでシュテムボオゲンと言つてはツダアルスキーに叱られるかも知れない。というのは、彼はその教程に於て、一度もシュテムボオゲンという言葉を聞いていないからである。彼はただシュテム姿勢という言葉を使つてゐる。即ち、彼の回轉は、身体の動きで導き出されただけである。身体が動き、つまりシュヴァンクを主体とするところに、彼の技術の不死の生命がある。彼は「二人の人間が交る場合、常にどちらか一方が『話し手』で他方が『聞き手』でなければ交りやがたは行かない、簡単なやうだがこれが原始的な法則なのだ」と云つてゐるが、彼は「話し手」であることを欲し、相手もまた「聞き手」なることを拒否した「話し手」だつたのである。彼が苦心の縮具は「骨折機械」とまで酷評された。縮具をめぐつて、滑降技術をめぐつて、兩者の間には烈しい争いが、口頭で紙の上で、また雪の上で長い間續いたが——一九〇五年ノルウェイ派の代表ホオンの美事な滑降振りにツダアルスキーが感心し、またホオンがツダアルスキーの熱心さに敬服するに及んで兩者の間に和解が成り立つた。ただ距離競争と飛躍競技における北歐の優位と山岳滑降競技、新複合における中歐勢の卓拔とは今日にいたるまでその大勢は變らない。

ツダアルスキーはシュテム系廻轉ばかり使つてゐたと思つたら大間違ひだ。彼は万人が出来るだけ短時間で習得し得るやうに、と最も習ひやすい技術としてシュテム系技術を強調し、その教程を示したのである。即ち、彼の書いた教科書を以て、また彼の指導する教授過程を以て彼の滑降技術だと思ひ込んでしまつてはならないのである。彼のシュテム系回轉とは、身体の動き方の結果ごく自然に招來されるシュテム姿勢で行う回轉なのである。彼は三十四歳にしてスキーに志し、六年の後即ち、四十歳にして「不惑」のスキー術を確立した。普通ならは三十四歳ともなると運動から遠ざかる年配であつて、到底劃期的なスキー技術の創始などとは思ひもよらないところであるが、彼がこの非凡の業をなしとげたのは、彼の資質のなみなみならぬことを物語るものと云わねばならぬ。

一九一四年第一次大戦が起ると共に、彼はスキーの教官としてオオスターリイ軍にその身を捧げた。が、單なるスキー教師ではない。氣象を觀測し、雪崩に就て教え、雪中の行動を指導するスキー教師であり、軍事顧問であつたのである。當時彼は既に六十に近い、普通ならば老人であつた。

彼のはげしい知識欲と徹底的な研究心はその比類まれな肉体的資質と相俟つて、われわれ後進に幾多の恩恵をのこしてゐる。彼は山岳スキー滑降法とその教授法の設立者であり、雪崩の研究家でもある。これのみではない、彼はまた

われわれのスキー行に缺くことの出来ないウインドヤツケの提案者であり、かの「ツダアルスキー・ツェルトザツク」の考案者でもある。これによつてわれわれのスキー行はどれだけ快適になり、またその天幕の御蔭でどけだけの人の生命が救われ、輝かしい登山業績が樹立せられたであろうか。更にまた、キロメタ・ランセを行ひ、一九〇五年には廻轉競技を、しかも現在のリーゼンスラロームの形式で行つてゐる彼である。サン・モリッツで前者が行われたのが一九三〇年、廻轉競技がアノルド・ランなどによつて本格的にはじめられたのが一九二五年頃であることに思いを致せば、彼の創造的才能がいかに時代に先んじていたかが分る。

ツダアルスキーのこの輝かしい、万人に恩恵をのこした業績が、自分の手ひとつで建てた山小屋に起居し、毎日の拭き掃除から炊事に至るまでのあらゆる家僕の雑役を處理し、自から細物針まで運びながらなされた事を考え合わせるとき、われわれは或る種の感慨を禁じ得ない。しかも、彼はこれらの仕事に感謝と敬虔な想念をこめて忠實に立ち働いたのである。彼のお茶の入れ方もよく知られてゐる。スキーを教授する場合にも人と交る場合に、男女の別、年齢及び社會的地位等一切を超越し、分けへだてをしないのが彼の掟であつた。生活に疲れ、心に悩みを抱いては人々はハルベルンライトにこの山の元老を訪れるのであつた。一つの訪問が三時間や四時間で終ることはなくもつと長いのが常であつた。彼の才氣煥發な

話し、その豊かな知識、ことにその人間的な温かさからにじみ出る滋味は人々に時の過つのを忘れさせた。そして、朗かになり豊かな心を抱いて山を降つて行くのが常であつた。われわれの言葉で云へば彼は「茶の湯」の名人であり、眞の意味での「茶人」であつたのだ。學術の華咲き乱れる十九世紀後葉工科大學に學んだ彼の知識は美事にその生活にわけこんでゐた科學的生活と哲人的——決して哲學者ではない——生活の實踐者であつたとも言へるであらう。

かかる善行と親しさに對して感謝を捧げる人は数知れなかつた。一九三六年、彼の八十才の誕生日には、お祝ひの手紙が八〇〇通も來たし、一六〇〇人も人が、ツダアルスキーのもとを訪れてゐるのである。ドイツ山岳界の長老であり、ツダアルスキーの高弟であるヴィリイ・リツクマースが、「氏は生涯を通じて、精神的にも物質的にも、他人の厄介になることをいさぎよしとしない潔癖家である。それでゐながら、氏自身は常に社會のために貢献し、他人のために心骨をくだいて奉仕してゐるといふ貴い人物である……」と言つてゐる。スキー技術も勿論ではあるが、かかる美しい彼の心情精神をこそわれわれは學ぶべきではないか。

去つた。彼は山岳スキー術の「英雄時代」の最も個性的なまた強い人格の持主であつた。彼は死にいたる迄、驚嘆に値する程の活潑な精神と營生即妙を失はなかつた。數時間大聲で話しつづけ、眼鏡を用ひずに自分の名を書き、若い者と同じやうな耳をもつていた彼ではあるが、残念なことに、世界大戦に従軍中に受けた、雪崩による重傷の隨伴現象のために非常な苦痛を耐えねばならなかつた。この雪崩によつて、彼は文字通り打ち碎かれ、もみくちゃにされて埋められ、その結果八十箇所の骨折をし數々の關節の脱臼を蒙つた。しかもそのうちの六箇所の脱臼は脊椎のそれであつた。再起は不可能とされた。にもかかはらず、彼は助かつた。否、彼の強い意志が生きた拔いたのである。醫者達も奇蹟だと云つた。彼の身體は歪み、足はまがつてしまつた。

以來二十五年の間この脊椎の眞傷のため、ぐつすり眠り通した夜は一夜もなかつた。或時はベットの端にひざまづいたまま、或時はまた机に向つて腰かけたまま夜の白むのを待った。が、鉄石の資質はこのやうな苦痛もよくたへ忍んだ。彼でなければ、きつととうの昔死んでしまつたであらう。不屈の意志は、數多くの來訪者にも、この苦しみを氣付かせなかつた。晩年にいたるまでのどの寫眞を見ても、大い彼は愉しさに笑つてゐる。自分の苦しみを訴へて他の人々の心を暗くすることを、彼はおそれたのである。ただ眞の近親にのみたまに苦しみを漏らした彼は從容として、死に對面し、死を凝視した。私は何も恐れない、

また、何も期待しない。と。が、彼もいよいよ死ぬ時が來た。循環系統の障礙のために起つた肺癆が心臓麻痺をひきおこしたのである。生前の拔群の功績より、彼の山ハルベルンライトに埋葬して貰ひ度いというツダアルスキーの希望は容れられた。

一九四〇年六月二十四日——それは丁度夏至の日であつた——の輝きわたる夏の朝、農家の牛車は國旗におほわれたい概を、トウレイセンの谷から一八〇米上の方のハルベルンライトまで曳き上げた。この道はツダアルスキーが生前幾たびとなく往き來した道であつた。彼の遺志によつて、概には極く親しい弟子と友人のみが從つた。埋葬者も喪服を着ずに、生前ツダアルスキーを訪れた時と同じ山地の服装であつた。ツダアルスキーにあつては、スキーは信仰であつた。そしてこの信仰は地上にスキーのある限り續くであらう。

會務記事

國体も目前に迫つてきて、登山部門を担任する本會では、連日連夜、大小の打合せが開かれ、同時に地方では、山梨支部及縣視察課内に設置された事務局の不眠不休の努力が續けられ、三者相互間には絶えず緊密に電報電話で連絡がとられ、役員、役員の往來も頻繁となつた。

九月二十一日 連絡理事会
かねて揮毫方依頼中の、會員足立源一郎画伯の、國体登山部門ポスター原圖二點が搬入された。
登山部門全面的協議、次に公開

登山(前號發表)の各班に、山岳界の先輩の特別参加を乞ひ、一般の参加者が、山行中に或は宿舎にあらゆる機會を通じて、山に關する多面的指導に與る機會を得られるように、と、左の會員諸氏に依頼状を發した。

足立源一郎・冠松次郎・尾崎喜八・石井鶴三・深田久彌・田部重治・河田植・瀧名貞利・小野幸支部長及之に準ずる各地の有力會員を、大会顧問とすることに決定した。

九月廿八日 連絡理事會
第四回關係打合せ
第五回國民大育大會登山部門、錦旗登山の實施方針研究
出席 愛知縣塩津市管理課長、三重縣教育委員、地元山岳團體代表、會員跡部昌三(兼名古屋山岳會)舟橋幸藏(小牧山岳會)本會谷口外數名
十月三日 協議會(圖書室)
主として公開登山の打合せ
出席 事務局員橋田濟美(會員)本部、入澤外

十月五日 大協議會(甲府)
午後一時から消防會館で開會、事務局、各地元山岳會、交通業者、旅館業者などの各首腦部代表者七十餘名出席、各担当事務、接待歡迎方法研究討議
本會、谷口・今村・關根・原、支部大澤・三井・今井・百瀬・岩間・飯島・片澤外、菅原山岳會古屋

夜、大會役員分担及細目打合せ事務局員原・橋田・支部大澤・今井・百瀬、本會四名
十月六日 協議會(大澤宅)
本行事及公開登山の細目打合せ大澤・今井・百瀬・岩間・關根・原

十月八日 協議會(朝光課)
會計につき、府縣代表から經費
徴集、各部面の支拂方法打合
出席 杉原・橋田(縣)・小田
和・古屋(支部)・原

十月九日
會員中里隆介を臨時應援者に委
嘱した。

十月十日 協議會(圖書室)
本行事務員分擔最後の検討。
公開登山のポスターが刷上つた
ので、本日休協に於ける協議に出
席中の全府縣より出席者に、
それ〴〵渡す。橋田氏に山梨縣分
を渡す。

十月十一日 協議會(圖書室)
大會行事要項決定印刷につき、
廣告申込交渉に赴く。中里・菅原
會報一四七號出来、徐々に昔日
の情に歸つた。

十月十二日 協議會(圖書室)
本行事務員分擔最後の決定
出席 橋田・百瀬・岩間(支部)
谷口・關根・原

十月十三日 協議會(圖書室)
本行事務員分擔最後の決定
出席 小野・原
同日夜 理事會
公開登山宣傳の具体的方法研究
大會役員その他の要項の原稿、廣
告原稿の決定。

十月十四日 協議會(圖書室)
本行事務員分擔最後の決定
出席 松方・藤島・入澤・谷口
堀田・望月・関根・村山・林・百瀬・原
谷口・原・中里・森久保・菅原
岡本(奥多摩)など。

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

十月十五日 以後毎日
十二時半、交通博物館から鐵道
電話で甲府の事務局と連絡

任とし、最近、支部の小野理事を
さらに商大現役の澁谷一郎君を加
えて、いよいよ本格的に發足する
ことになった。

夏期合宿指導 八月一―十日
岡山縣玉野市玉野第二高校(女)
山岳部では、穂高岳・洞澤で合宿を
行つたため、その指導を本會へ依頼

支部記事
立山室堂小屋開設
富山支部
今度、富山營林署の厚意により
立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

立山室堂の隣接の
營林署小屋を富山
支部が管理して日
本山岳會員の用に
供する事になりま
した。常時番人は
在住致しません
燃料、備品等完備
して居りますから
御利用下さい。

され、川森時子・新村正一・吉田
元・網藤志朗など實踐部役員を派
遣した。

女子の山岳綜合訓練は翻期的な
ことであるし、それだけ各方面の
注目を浴び、期待もされたが、参
加者九名、活潑に訓練を受け目ざ
ましい成績をあげた。(詳細「山」
十月號)

使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營

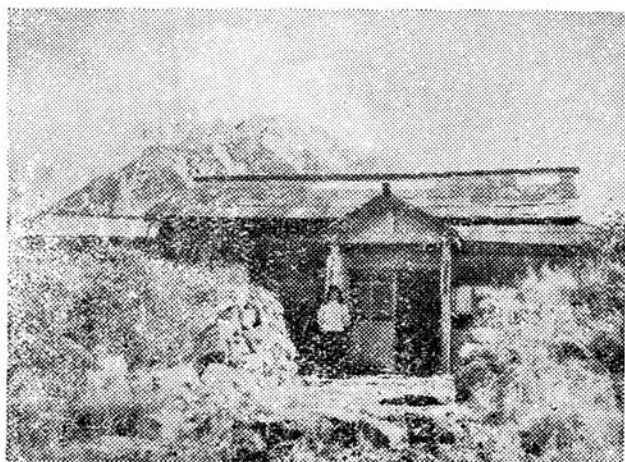
使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營

使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營

使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營

使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營

使用出来ます。
日本山岳會富山支部
室堂小屋使用心得
一、當小屋使用の會員は事務所に
於て鍵を貸與された者に限る。
二、當小屋に會員外の使用者(營



三、會員は主として見取圖中(口)
(ハ)の二部屋を使用すること。
四、備品は使用後正しく元位置に
復して置くこと。
五、薪は備付の外は附近の枯損木
を使用すること。
六、小屋使用後は戸締りを正しく
し、嚴重に鍵を下して置くこと
七、鍵は使用下山後直ちに事務所
に返納すること共に、小屋の状況
を報告すること。(見取圖次號)
富山市衣町三〇
日本山岳會富山支部
今冬と來春のスキーと
山行について 東京支部
でさうすれば、十二月初旬か中旬
に妙高山麓の閑あたりで、スキー
の初練習をし、一月は別項のよう
に講習と乗鞍登山をやり、二月は
細野が關、又は遠見の下に、北穂
の小山氏が建設豫定のスキー小屋
が完成すれば合宿を行い、三、四、
五の三月は、關あたりを根據とし
ての妙高火打、乃至上越地方の山
々へ、清水・藤原・銀山平・淺貝
その他あらゆる根據地からの山行
北アの山行、六月も之等の延長で
その間、白峰・赤石あたりへ輪か
んちきの山行も加えたいと思う。
終戦後空白だった私個人、冬
と春の山行を充實するとともに、
支部の山行計画充實の一助とした
い。六月は本部のウェストン祭が
あるので、山の行事は、多彩な縦
走の外に、洞澤のスキーなども考
えているが、冬春の本部の講習や
山行があれば勿論これに参加する
つもりである。個々の計画は、そ
の都度會報などで發表する。各位
の御指導をお願いし、特に若人や
新人の参加と計画の發表を切望の
餘り、あえて「年寄の冷水」を省み
ない次第である。(原全教記)

圖書室に關する報告

工事完了から既に半歳になる。集會に、事務打合せに、或は地方會員の宿泊に、クラブルームとしての利用價值は充分に發揮しているが、ライブラリーとして態をなすのは、これからである。

資金の面でも、圖書雜誌資料の面でもまだ會員諸氏並びに同好者の助力支援を仰がねばならぬ。現在までに集まつた山岳文獻(殆んど全部が會員の寄贈にかゝることである)の整理を進めるに従つて、山岳圖書館としては非共欲しい圖書會報部報の類を書き上げ發表してゆきたいと思う。

寄附者芳名

一千元 加納一郎 岩井光義
五百円 水野祥太郎 町田一碧
山田豊三郎 松山英夫 佐藤耕三
二百廿円 中島正文
小計 四、七二〇円
累計 六、七四四、七四五円

十月一日現在

報の英國山岳會誌の外に物故會員高橋健治氏の所蔵された磐城山岳會年報を購入れた。會員加賀正太郎氏寄贈の油絵(御岳の一角、中村清太郎作)水彩(故茨木猪之吉作)も近く壁間を飾るであらう。

第二二回小集會

村井 米子

八月を休んだ小集會は、九月十五日(第三木)に、既報の研究シリーズの「山村の民家」について、東京支部理事の石原憲治博士の話を聞いた。日本全國を歩き、自ら寫眞を撮影してられる篤學の

國體豫選雲取山
集中登山

集合當日の九月廿三 是牛僧の空模様に、正午頃から雨は降り出した。「氷川方面は大分荒れて居りますから登山はお見合わせ下さい」と青梅驛のマイクは警告している。電車の窓ガラスに吹きつける雨滴は滑降レースの最中である。その窓を通して望まれる多摩川は黃濁して水源地の豪雨を思わせた。終點氷川驛の改札口を出ると藤井、神谷、坂倉諸氏の張切つたお顔を始めて、後援團體奥多摩山岳會の人々の姿も大方見え、新宿から集合して来る参加者の到着を氷川山荘で待ち受ける。雨は中次郎に小降りとなり、幸にも一行登る頃にはどうやら天氣回復の見通しもつく様になった。

己ノ戸、大ダワ、仙人尾根の三班は氷川山荘に、残る鴨澤、後山の二班は羽黒山バンガローにと別れ、夕食後七時より氷川會館に集合。東京都山岳會理事長藤井氏、奥多摩山岳會會長代理金子氏の挨拶、神谷兩氏の奥多摩の山についての面白くお話、氷川町長木村氏の祝辭、大摩摩觀光協會木村氏の奥多摩を中心とする觀光事業關係の講演に続き、山とスキーの十六ミリ映画四本を鑑賞してなごやかな空氣の中に明日の山行を楽しみに各自定めめの宿舎に歸つた。

明くれば快晴の廿四日。足どりも軽くマーチに合分せて参加者約一〇〇名六時三十分氷川驛前に集合、最年少十六歳の新制中學生から最高齢者六十六歳の紳士、十名前後の婦人を混えた一行は、日原

方面から雲取山に向う班と、青梅街道筋から登る班と、台の貸切バスに分乘して出發。バスの前にはオリンピックの出発をかたる國体の旗が交互して朝風にひらひらはためている。

各班とも今頃他の班はどの邊に登っているかと思ひ巡らしつつ、清澄な大氣を吸い込んで秋草の花しめやかに咲く中を隊伍整然と登路を辿つて行つた。高度をかせぐに従い溪流の音も次第に遠ざかり各班とも稜線に出る頃はすすきの穂が歡迎の波を打つていた。

最短コースを行く鴨沢班の二時四十五分雲取山の家着を初めとし、大ダワ班、後山班、己ノ戸班、仙人尾根班の順序で一名の故障もなく小屋に到着、集中登山は茲に成功を収め、楽しい晚餐の後、仄暗い山小屋の燈火のもとで夜の行事に入り、各班の報告、小屋主カマ仙人こと富田氏のお話があり、餘興として廣く出題を募つて「山岳十二の峠」をやり、世上のインフレをよそに鐘は大大分賑く、山の家鎮の法華堂より拜借した本物の鋼鉢は幾度か鳴り渡つた。後援の毎日新聞社の寫眞班のフラッシュが頻りにひらめく。和氣あいあい裡に閉會、御來迎を楽しみに健康な眠につく。

第三日の廿五日は午前七時迄に全員山頂に集結。この日も快晴、雲量少く、富士は固より、遠く彼方に淺間の噴煙、尾瀬燦岳の双耳峯、眼前に迫る飛龍山の右肩から鳳凰三山、更に奥に北岳、間ノ岳、稍離れて甲斐駒ヶ岳、間ノ岳の山々、又奥秩父主脈をすつと目で追えば甲武信の特徴的な丸い頭、そばに寄り添うが如く木賊、

三寶の夢幻的な彩色の山肌。三百六十度の大パノラマが限なく視界に入る。今回の企圖はかくて観望度く終りを告げたので、下山コースは鴨沢班、七ツ石がら尾根通し、藤ノ葉山經由氷川へ降るのと二班に別れ、よき思い出を胸にして今日の名残りを惜しみながらそれぞれ山頂を後にした。(飯倉黎子記)

海外 ニュース

諾威ヒマラヤ遠征續報

栗飯原健三

諾威山岳會からヒマラヤ偵察の爲インドに派遣せられたネス教授エーランドの二名はカシミール入國を交渉したが遂に許可されなかつたのでテリッヒ・ミール登山の爲シットラルの許可を得ることが出来た、そしてポーター其他種々な問題はあつたがテリッヒ・ミール七千八百米の高峯をよく六千八百米迄達し三ルートを確認して下山した

來年夏には數名より成る遠征隊を派遣する模様である、同山は今日まで登頂を試みられたが五千七百米までしか到達しなかつたものである、兩氏は歸國早々にして各種の整理に忙殺されているので詳細はまだ發表されてない

向ヒマラヤ遠征隊員のトレジャーは今夏瑞西アルプスのために行われツェルモンツトに據つてマッターホルン、モンテ、ローザに登りシャモニに移つたが、荒天で思わしい成果は得られなかつた

先日圖書室で原さんに會つた時その内この室で山に關するレコードコンサートでもやつてくれなかつたとお話が出て、折角ですがとお断りしたことがあつた。一体音楽と山の好きな私として又頼まれればいやと云えない性分できつぱりお断りするというのは如何にも残念なのだが、何しろ數十年を費して集めたレコード(と云つても三百枚足らずのものではあるがかなり珍らしい物は持つていた)を去廿年五月の震災で一夜に全部を灰にしてしまひ再びレコードを集める意慾を全然失つてしまつた終戦後ある山岳會で「山と音楽」の話をさせられレコード抜きでやつたものの甚だ無味乾燥なものでお話にならなかつた。それから云つてこういつた特殊の點から今更レコードを集めることは私には財力的にも時間餘裕の點でも到底出来そうもないからレコードコンサートにこゝに一文を草して會報の埋草に提出する次第である。

昭和十三年頃(生憎手許に資料がないからよく判らぬが)ある山岳會で岳友勝、勝君に誘われて毎月レコードコンサートをやりました。一年程續けたことがあつた。終にはだんだん音楽の方へ力がはいりまして山との關係が薄くなつてしまつたがとにかくそのお蔭で私自身も音楽的に色々勉強も出来又レコードも十数枚新たに買入れたりしたので可成良い副産物があり又其頃書いた雑文は拙著「山の組曲」に載せてある。其頃必要なレコードを間に合はせるのは大した困難がなかつたが蓄音機を借りる方は仲々骨が勝負君が色々苦心して呉

れたのを今でも有難く憶えている主催者側にしてみれば苦しいながら楽しい金でたつたと云えよう。山に關する音楽と云えば歌の方では直ぐ思い付くのがヨリ地方の民謡では元來スキスやチロル地方の民謡で所々非常に高い音を裏聲で唱うので有名だが、この眞似をした寄席藝人の歌も仲々多いが山黨にはやはり原産物の方が快い。ヨリデルに次いで野鳥を扱つた曲又はバスターール(田園詩)風の曲などは軽い円舞曲などに多い。高級なものではシェニールやヴァオルフ邊りの歌曲やエルトゲン(もつともこれらは山に關する云うより我々に山を連想させる曲だ)この方の一番

山のレコードと合唱

瀧名貞利

めの交響曲」で三樂章から成る仲々美しい曲だ。(これは二度私のコンサートにも出した)又私の試案では「山上の一日」と云うたのレコード、コンサートと云うた。これは朝は日の出の光景が野鳥の歌、雲や溪流の曲夕日の景月花の曲、山小屋でのワンダーフオーゲルの合唱など組合せて演奏したら面白いだらうと其曲目の選定にあれこれと思案して居たが遂に實現出来なかつた。

生來音楽好の私は又合唱が何より好きで、大正七年以來のコーラスボーイである。大菩薩峠に初め登つた時も合唱仲間と行き峠の上で合唱をやるのが此山行の一つの目的だつた位である。登山やスキ

山麓の出發から登行雷雨に遭つた所などあつて登頂までを標題樂風に表わした面白い曲だが残念ながらレコードはない。原作では普通の管絃樂器打樂器等の外に芝居やラヂオで使う雷や風の擬音装置まで使う非常に大掛りな曲だから未だマイクの使い方が巧くなかつた時代には到底レコードに吹込めなかつたらしい。日本では上野の東京音楽學校のオーケストラで一度だけ演奏したことがあつたがあまり香ばしい出来ではなかつた。こんな大曲ではないがレコードに吹込まれて日本でも聞かれた曲は佛蘭西のヴァンサン・ダンディ作曲の「山の唄」によるピアノと管絃樂のた

ルの様に山小屋で唄ひ合つたらどんなに愉快だらうかと思ひ、スキの時の曲を頼まれる。独乙民謡の容易しい曲を教へて一緒に唄つたことも度々あるが之は独乙民謡の何となくして此計画を日本語で訳山の人々とやりたといふ願ひ。之は朋友堂主の新島氏(ハイキング誌主幹)にも話して賛成を得たが扱て實行するとすると曲目の選定はさして困らないにしても、歌詞の方で閉口した。一体日本語の歌詞といふものは、奇麗ではあるが力が弱く女學生向のセンチメンタルに向くが男性向の強いアクセントが利かずともやもやして居て面白く

ない。それに普通は男聲合唱の曲が欲しいのだが四部合唱となると聲域が廣くなつて仲々各部が揃はないから二部か三部の曲を選んで手頃な曲集を作らうとしたが遂に纏らなかつた。(二部三部でも齊唱のように間が抜けないから充分和聲を樂しめる)然し私自身は音楽好きな岳友と一緒にスキの合宿をやつて温泉宿の湯槽の中で又は炬燵を圍んでよく唄つた。又合唱仲間を誘つて軽いハイキングをや山頂や峠の上で充分唄つて楽しんで事も再三ある。然し山小屋で唄うとなると自分達のグループだけで占據しない限り仲々思うよう

にゆかない。ある春八方尾根の黒菱の小屋に音楽と山の好きな仲間數名で泊り晝は大いにスキーをやつた夕食後二曲短炬燵をやりながら忽ち隣室から入笠しといひつた。我々の方としてこれは古典的な静かな曲をやつたのだし而もまだ宵の内で安眠妨害になる時間でも無かつたのにさうして山の氣分を壞す俗語でも唄つたかの様に扱われては甚だ心外だと思つた。それでその次の冬には白馬山梅池の或小屋を我々だけで獨占し十二分に唄う計画を建てたが、一足遅れて参加した私が到着する前に岳友の一人が雪崩の犠牲となつてしまひ合唱どころの話ではない大騒動となりそれより山小屋で合唱をやる機を失つてしまつた。然し山小屋での合唱はいつか再び計画して岳友達と充分唄いたいと今でも考へている。

念ながらまだ拜聴する機がないが。(二四、九、一五記)

山日記編集室よりのお知らせ

日本山岳會例年の大きな事である、山日記の編集は、今年度六月から準備委員會を開いて鋭意その完成を急いで居り、大よそ十一月下旬には發賣の豫定であります。

本年度は昨年の欠點(所有者カードによる各位の改訂希望事項)を検討吟味し、特に紙質裝幀には堅牢優美を主目に注意を拂ひました。

内容も新に登山日程表、山岳圖書目録、全國登山團體一覽表、地名、讀、登山用品重量表の各項を加へ、再調査によるその他の項目の増補を併せて一冊の充實を圖り大方の利便に資するため万全を期しました。

豫定価格は二百円、總員三五〇員會員は百八十員
特點として發行前の豫約申込は送料共百八十員(送料費負担)
會員外も團體等で十部まとまれば一部を贈呈します。

配本の都合等ありますからなるべく本會宛豫約お申込下さい。
送金は小爲替或は本會振替口座への振込が便利です。
振替口座東京四八二九番

日本山岳會協會

第10回展覽會

12月1日—6日

於日本橋三越

會員通信

京都 西岡 一雄

屋久島は思ったよりよい山をもち、ことに溪谷は内地にくらべて第一流たることを感心して参りました。滞在廿三日一昨日歸京いたしました。……下略、十月五日

屋久島にて 今西 錦司
南九州の雄、市房山・石堂山・開闢岳に登つたのち、京都からきた西岡一雄、梅村忠夫兩君と会談し、十一日鹿児島出発、型のごとく小杉谷から宮ノ浦岳に登りました。山中と岩小屋に一泊、湯泊への下山の途中、猛烈な豪雨に遭つたが、雨傘をさして歩けるほど林道がよいので助かりました。あと数日鳥を歩いて見ます。松方会長と村井米子さんによろしく(二四九、一六)

(今西氏は學術的調査、西岡氏は岩登りに行かれた由、ことに西岡氏は六十四才、壯者を凌ぐ元氣で心強い限りです。原。)

信州、下伊那 片桐盛之助
拜啓御無沙汰致しております。御元氣でございますか、私共皆無事であります。近い内小生上京開店します。どうぞよろしく御願ひします。場所は上野松坂屋近く湯島寄で、山岳会ルームに近い場所であります。皆々様へどうぞよろしく(十月三日)

東京 山本 優
拜啓、今度の遭難事件で、大變御迷惑をおかけ致しました。昨日松本醫大の附屬病院を退院(中途退院でまだ全快までは行つておりません)まして、夜行で今朝初めて歸京した次第です。

事故報告といつても、墜落前(實際は墜落と同時に思いますが)全然意識なく、二十五日(翌日)になつていくぶん意識をとり戻したような訳で、細いことは判りません。

七月廿四日午後一時頃、パーティは小生と他一名、都合二名で、場所はジャンダルム飛騨尾根下降中、第二テラス下(二五〇米位)だといふことを同僚から聞きまして、滑落、頭部四箇所受傷と、それによる頭蓋骨骨折一箇所を負い、その他背中及び手足等に多少の切傷を受けました。

その日は京大その他の人々の救助により、墜落現場にて天幕をはり、翌日、明治の大塚さんを始め吾々のグループの者や人夫數名と共に頼高小屋まで行き、翌廿六日上高地へ下り、さらにその翌日(廿七日)松本へ下つた次第です。以上かん單ですが事故報告を致します。(八月下旬報告)

スキー講習會
日本山岳會東京支部、岐阜支部、岐阜スキー連盟、場所 高山線坂上(飛騨坂上村)附近の山野
日時 一九五〇年一月一日―五日迄
講師 會員(全日本スキー連盟指導員 福岡 孝行 松田 芳男 村松 巖)

費用 一四〇〇圓(宿泊食事一切) 交通費及経路 往、東京、岐阜(乗替) 坂上(六四〇圓、急行券二〇〇圓) 復、坂上、富山

直江津上野(五六〇圓) 出發 十二月廿一日廿時半東京發大坂急行 關西・中京方面の方は岐阜又は坂上から参加が便宜。
集合 當夜六時東京驛内、同列車改札口、JAC旗(緑地に白で正章案抜一目、係に連絡し行列申込 十二月十五日迄本會宛、八四〇圓 往來車券代を添え申込 係 原全教、中里隆介
裝備 原全教、中里隆介
由、ワックス類は現地に用意) シールあれば持参、ルックサツク、スキー靴、靴下及手袋(厚薄)ズボン、ズボン下、上着、スエター、帽子、マフラー、アノラック、携行品 燐燐二食(車内用)、滞在品の嗜好品、保革油、筆記用品、チリ紙、マツチ、細紐、針糸、荷札、携帯用電燈、風呂敷、魔法瑠注意 携行品には必ず自分の名を書く。参加者は福岡講師著「自然なスキー」を豫め讀み且つ持参された。

講習日程 一月一日十一時坂上驛着、一旦宿舎につき、クラス割をきめ、晝食後講習會開始
本會及地元代表挨拶、講師助手紹介
十三時半講習開始、十七時入浴
十八時夕食、十九時懇親會、廿時就床
一月二日 七時起床、八時朝食
九時講習開始、十二時晝食、十三時半開始、十七時入浴、十八時夕食、十九時懇親會又は映画會、廿一時就床
一月三日 六時半起床、七時朝食、八時開始、十二時晝食、十八時夕食、十九時懇親會及研究會、廿一時就床。

山岳界の世界的古典

故 辻村伊助著 待望の再版なる

スウイス日記

ウエストン門下の逸足としてヨーロッパを跋渉、高山植物學に専心し數多の業績を残す豪華本につき書店に出ません直接御注文下さい。
送料振替東京一八四九六郵便局代官町二

思案社刊

B6判上頁紙五一六頁
寫眞六張地圖セガンチ
ニ原色版箱入五五〇円

一月四日 六時半起床、七時朝食、八時ツアア又はバツヂテスト
十二月晝食、十三時半バツヂテスト又は講習、十七時入浴、十八時夕食、十九時懇親會、廿一時就床
一月五日 六時半起床、七時朝食、八時開始、十時講習終了。

乗鞍スキー行
日時 一月五日夜高山泊、岐阜支部(飛騨山岳會)と打合せ懇親會
一月六日早朝、高山(バス一時間半、約六里)旗竿(下車)―收―久手―平湯峠―猫ノ小屋泊
一月七日以降、小屋―四ツ岳下―大丹生岳下―桔梗ガ原―鶴ガ池―コノコノ觀測所下―肩ノ頂上
右の経路によつて登頂し、平湯或は千町ガ原經由など、總て現地とその時の事情、参加者の情況により方針を決めて實行し、九日に終了の豫定。

保 原全教、中里隆介
費用 一五〇〇圓(概算)
申込 十二月十五日
裝備 スキー講習のもの以外、アイゼンのある人は持参、寝袋又は二枚綴き毛布、靴下及手袋(防寒効果的なもの)オーバershoe

山の寫眞とカメラの店

貴方の傑作は……

高級 D.P. 山映商會で完成!!

オールカメラサービス 高級 D.P. 寫眞材料

8.16. ミリ映畫製作 カメラ部品製作修理

有限會社 山映商會 風見武秀

東京都中央区銀座西 4の1 TEL京橋(56) 3073

槍又は笠ガ岳行
乗鞍登頂後の都合で行動、細目は未定

ス、小ルック等
食糧 中食用パン類及副食類
打合會 十二月廿日頃までに二回行つ。

